

# 会員の ひろば

## 鯛の鯛

胆振西部医師会  
洞爺協会病院

後藤 義朗

魚の骨を材料にするアラ料理は、まかない料理の一つとして、食通には堪えられない。先頃プリのアラ煮で味を占めた食通でない筆者が鯛のアラを同じような物だろうと錯覚し安易に手を出したのがことの始まり。

料理法をネットで確認すると、一番簡単なアラ炊きでも、酒と牛蒡が必要だ。そこで、深夜のコンビニにも足を運んだ。仕事も料理もいつも泥縄なのだ。

まず、食べやすいサイズに小さく切るといっても骨が硬い。自前の包丁では、まるで歯が立たない。まさに「硬骨魚」の第一人者だ。切れるところまでにして、熱湯をかけた。鯛のお頭は、見る見る白くなり輝いてきた。やはり、「腐っても鯛」だ。どんな状況でも風格があるものだと感じる。

コンビニ銘選の酒でもおいしくできた。牛蒡との相性も良い。骨が硬いが、ニシンのように細くないので、食べながら分別は可能だ。でも、プリのアラより身の部分が少ない（肉の部分は刺身等にとことん利用されるのだからもちろん残るわけがない）。骨部分が多いスープだが、味は上品である。鯛は姿形ばかりでなく骨まで気品がある魚だ。だから「鯛」なのだ。「こんな夜中に牛蒡かよ」とぼやいていた「牛蒡おじさん」には十分な見返りとなった。

古代から食用に供され、「めでた

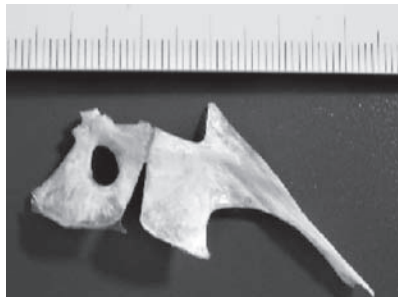
い」との語呂合わせから、お祝い膳には尾頭付きや刺身で登場する立場は今後も変わらないであろう。

「眼」も見つけた。食通にはこの眼窩の脂肪組織がたまらないご馳走だが、少々気後れがする。睨む目も怖そうで、眼を患った筆者には特に痛烈だ。食通はカマや唇の肉を珍重するというのが、食べやすい肉厚の部分の方がよほど良い。

食後のネットサーフィンでも鯛の骨がなぜ硬いかを答えてくれないが、硬いことは確か。包丁の刃も欠けるほどで、怪我をしないように注意書きが付く。やはり、怪我しない程度に処理したのが良かった。そうでないと、「タイと遊んで怪我するケツタイな奴」と揶揄されるかも。

Wikipediaでは「鯛の鯛」の項目があった。鯛は馴染みが薄い魚なので「鯛の鯛」は初耳だ。胸ヒレの付け根にある小さな骨のことで、写真でも小さな鯛に見えないこともない。肩甲骨と烏口骨が合体したもので、肩甲骨の部分に神経が通る穴がある。そこを鯛の目に見立てるわけだ。これは、江戸時代から「めでたい中にさらにめでたい」と縁起物として取り扱われていて肌身から離さないでいると金運に恵まれるという。だが、元来金には縁遠い者には果たしてそこまでのご利益はあるのか。しかし、その存在を事前に知っていたら『鯛の鯛を見つけた』と付記できたのにと悔やまれる。

「鯛の鯛」の形状は鯛の中でも真鯛のものが一番とのこと。「キンメダイ」は発音からお金に関係がありそうだが、真鯛と種類が異なり深海魚の一種だそうだ。「タイ」と名称がついても鯛でない魚もあるので、言葉だけに騙されてはなら



ない。やはり、鯛は鯛。由緒正しいものしか残れない。

ところで、昨今の厳しい医療事情における病院経営では、由緒正しくても、名を成しても、腐った鯛は生き残れない。めでたさを表す赤色も、年度末で決算を整理する帳簿上で踊ると強烈に目に沁みできて涙が出るのはなぜであろうか。

（後日談：鯛の鯛を見つけたので記念撮影。あわよくばこれで決算も締めタイと期待しています）

## 新医師臨床研修制度

札幌市医師会

竹村 敏雄

### インターン制度

インターン制度は、GHQの命令でその当時アメリカで実施されていたインターン制度にならって、昭和21年から実施された。

大学医学部を卒業した直後から1年間のインターンを受け、インターン終了証明書を添えて医師国家試験を受験できるという仕組みで、この両者は初めからセットで実施されていた。

このインターン制度は、臨床全科目の実地修練実施であって、大学医学部卒業者を医師にするための教育、すなわち医育制度の一環であり、文部省の所管であるべきだったが、これが厚生省の所管になったのはなぜであろうか？

大学医学部卒業者に対する医師免許証交付は、昔から厚生省の所管であった。

敗戦後間もない連合国軍占領下の昭和21年から始まった医師のインターン制度と医師国家試験制度は、セットで行われたので、この両者は戦前から医師免許証交付を行ってきた厚生省の所管になったと思われる。

昭和43年5月15日に医師法の一部が改正されて、インターン制度

が廃止された。これによって医師国家試験はセットから開放されて単独の制度となり、大学卒業後直ちに医師国家試験を受験できるようになった。

### インターン制度の真似

昭和43年5月15日のインターン制度廃止から34年もたってから、厚生労働省の国家公務員が、敗戦後間もない昭和21年から始まったインターン制度が厚生省の所管だったことを思い出して、十分な調査もせずインターン制度を真似て、突如、平成14年9月27日に「新医師臨床研修制度のあり方について」という案を公表した。

インターン制度を真似た点は、7科目の臨床研修科目、各科をローテーションする研修方法と臨床研修の義務付けであった。この研修義務付けが大問題である。

占領軍の命令で始まったインターン制度では、大学医学部を卒業した直後から1年間のインターンを受け、その終了証明書を添えてやっと医師国家試験を受験できるという仕組の義務付けであった。

新医師臨床研修制度では、医師免許証を持っている医師の臨床研修（医育制度であって文部科学省の所管が正当）であったが、厚生労働省の国家公務員は、昭和21年から始まったインターン制度で占領軍が行っていた義務付けを真似て、2年間の臨床研修を法律で必修とした。

この2年間の義務化された研修によって、大学医学部卒業生の2年分の人員が診療実務に参加できなくなって、今まで一度も見たことがないほどの医師不足が発生し、思いもかけなかった地域医療の崩壊現象が進行しつつある。

この新医師臨床研修制度を、1日でも早く廃止しなければならない。

### 戦後の歴史が必要

このような現象が起こった源は、「敗戦を忘れた報い」（北海道医報第1082号）の中でも述べたが、敗戦の後で連合軍に占領されて

いた事実や、軍政がしかれていたという事実があったが、それらの事実を国民に知らせていなかったために、ほとんどすべての国民が新医師臨床研修制度の間違いに気付かなかったと考えられる。

戦後の歴史を正確に国民に知らせることが大切であると痛感した。

## ペンギンが空を飛ぶ

札幌市医師会  
市立札幌病院

### 向井 正也

これは、昨年のBBCだったかが作ったエイプリルフール用のCGの話ではなく、文字通りペンギンが空を飛んでいるように生き生きと水の中を飛ぶ話。最近では旭山動物園が有名で、映画にもなっていますが・・・。

昔からなぜか水族館が好きで、どこかに旅行をして時間があればその地の水族館を訪れることがしばしばです。例えば、学会に行っても、わずかな時間の間に行ったりします。大阪で学会があったときに昼の時間を利用して行ったのは海遊館で、ここは巨大水槽の中のジンベイ鮫がことに有名ですが、注目は少し横にある階を貫いてある縦長の水槽です。ここにペンギンがいて、すごい勢いでペンギンが現れてはまた下のほうに潜って行き、その速さに目が届かないほどです。しかし、ここはなかなかペンギンの泳いでいる全体像が見えづらくて、飛んでいるイメージがつかずらい感じです。もっとも平日の昼さなかに背広を着たいい年をした男が一人で水槽を覗いて見て回っている姿も異様なもので、大きいことは言えませんが。

ペンギンが飛んでいて、「ああ、やっぱり鳥なんだ」と感動を覚えた水族館はアメリカ留学中に行ったNew London 近郊のMystic Marine Life Aquariumです。どちらかという

こぢんまりとした水族館です。

当時のボスは大変細かい人で、毎日実験結果を聞かれて閉口したのですが、「お前は、勉強ばかりでなく、広くアメリカを知るべきだ」と言ってくれたと、当時の英語能力でそう勝手に理解して、ずいぶん旅行をさせてもらいました。

それは1992年の感謝祭の休日で、Long Islandの北側の先端（島はフォークのようになっていて東に二つの先端があります）のGreen port からフェリーに乗って対岸のNew Londonに行き、その近郊のモーターを探して泊まり（アメリカ国内の移動に慣れてからは、最終目的地以外はほとんど予約を取らずに空いているモーターを探していました）、翌日朝早くにそのモーターのすぐ目の前にある水族館に行きました。客はわれわれ家族以外にはほとんどおらず、貸切のような状態です。そこは天井が低いものの巨大な水槽があり、白いイルカが三頭悠々と泳いでいます。他にあまり見物人もいないもので、彼らの方も興味深げにわれわれの方によってきます。物静かで落とされた照明の中でイルカとアイコンタクトをとるというもう二度と味わえないような体験です。そこでは時間が経つのも忘れてじっと見つめ合う時間が過ぎていきましたが、他の展示も見に行きました。

屋外の光を取り入れ、子供が海の生物に触れることのできるおなじみの浅い水槽があります。ただ、ここにはヒトデやウニさらには小型のエイ等のおなじみのものも当然ありますが、なんとカブトガニがいるではないですか。日本では天然記念物だぞと思いつつ、そういえば、近所の日本人の家の庭にこいつの殻が放置してあって、Long Islandの北の海には普通にいるなんて言っていたなど思っていたら、孫を連れてきているおじいさんがいきなりカブトガニを捕まえ上げて、裏返しこれはオスである。メスとの違いは云々と孫だけでなく、われわれにも説明してくれます。残念なことに内容

はすべて忘れ（先日ビデオを整理したら撮影してあったので、よく聞けばわかるかも）、思い出だけが残っています。

この水槽のさらに奥の屋外に出たところから、本題のペンギンの水槽をみることができます。これはペンギンを泳いでいるところを横から見るもので、上のほうには立っている姿が展示されていますが、たくさんのペンギンがそれぞれ空を飛ぶようにすばやく泳いでいる全体像が見れ、子供はともかく、親は大変興奮しました。今まで、ペンギンが目の前で実際に水の中を自由に飛び回る姿など見たこともなかったのですから。ああ、ペンギンは鳥なんだと大変納得させられました。

この後にもう一度イルカに合いに戻ったら、もう大変な混雑で先程のような神秘的な出会いはもう期待できない状態です。やはり早起きは三文の徳といったところです。その後BostonのNew England Aquariumに行きましたが、こちらはもう巨大な水族館で混んでいたという印象ばかりですが、今回の文章に合う写真でもなかったかとアルバムを見てみたら、何とBostonの水族館で、妻がカブトガニを捕まえて、子供たちに何やら説明しているのを見つけました。もう記憶にありませんが、この水族館でもカブトガニに触れることができましたようです。

ここで、ペンギンにこれほど感動してしまうと、もう後は同じものを見ても、ああ、泳いでいる泳いでいるという感じで、感動はさほどしません。旭山動物園に二度目に行ったときも（一度目は留学前で、まだリニューアルされる前で空の檻があって中に入ることができ、檻の前に「ヒト」なんていう看板がついているしょうもない所だった）、ペンギンは、ああいるなという感じだったけれども白熊やオランウータンの生き生きとした姿に親だけが感動して、しっかりリピーターにさせられてしまいます。しかし、あのオランウータ

ンのオスは塔の一番天辺でずっと遠く旭川の方を見つめて、いったい何を思っているのでしょうか。Malaysiaに学会で行ったときにオランとはヒトのことであり、あちこちにオランと名のつく民族が住んでいて、オランウータンも昔は森の人として人類と同類として扱われていたのかと思うと感慨深いものがあります。

昨年、New Zealandに旅行に行ったときもAuckland郊外の水族館にわざわざ行って、入場料の割に（今はすごい円高なのでそれほどでもないかもしれませんが）内容の貧弱さにちょっとがっかりしてきましたが、そこには大きなペンギンの冷房（冷凍？）つきの巨大展示室があり、その周りの軌道沿いを小さな乗り物に乗ってガラス越しに中を見学できるようになっています。4人乗りの車の前の座席にお母さんと一緒に来た2歳くらいの女の子が座っており、最初の暗い通路で、ガクッと急に下りるところでもう不安で「ダディ〜」などともう泣きそうになっており、先が思いやられましたが、ペンギンが現れるやもう夢中で、母親に向かって、「Look!」と大興奮です。ここで、「見て!」というときは恥ずかしながら「See!」ではなく、「Look!」を用いることを知りました。そう言えば、どこかの旅行会社もルックという商品がありましたね。それはともかく、ここにはたくさんの種類のペンギンが所狭しと並んで立っており、中には卵を抱えているものもいますが、残念ながらプールは見え、飛んでいる姿は見えません。ペンギンの展示には、彫像のように立っている姿ではなく、ぜひ生き生きと飛んでいる姿も見せて欲しいものです。

昨年のCGの空を飛ぶペンギンのあまりにリアルな映像には驚かされましたが、水の中を飛ぶペンギンはやはり感動させられます。まだご覧になっていない方はぜひ一度ご覧になることをお勧めします。わざわざConnecticutまで行

かずとも旭山で十分に堪能できます。特にペンギンは立っている姿しか見たことのない大人の方が間違いなく子供より感動できますよ。

